

43 高岡長崎家収蔵の『寥山翁方集』をめぐって

正橋 剛 二

高岡の長崎家には同家の記録によると「所蔵書八千巻」に及ぶとされているが、これらのうち、現在に伝わる医学関係の刊本および写本については、すでに寺畑喜朔氏により整理され、目録も公にされたところである。

これらの多数の蔵書は、もちろん、一代にして成ったものではなく、当然、代々の金創医として家業がうけつがれている間に、次第に蓄積されて来たものと見るべきであろう。

長崎家歴代のうち、大槻玄沢に師事し、かつ親交あった第五代の浩斎が特に有名で、すでに関連の著書も出版されたところであるが、演者はここで、このような浩斎を育て教育したその父蓬洲（玄庭）の人物像に関心をもち、その行跡の調査を進めているところである。

そこで今回は、蓬洲に関係ありと見られる一冊の写本、すなわち

(外題) 寥山翁方集

(同副題) 原名救民要薬一号帳中自秘

(内題) 救民要薬集 諸家秘方

橘 敬明編集

右の写本を調査した結果について報告する。

本書は二〇×一八・五センチの大きさで、本文三一丁、きちんとした表紙題箋もつけて和とじて装幀されている。内題の次の行で明らかのように、橘敬明の編集になる諸家秘方集が本書の中心をなし、それには第二五丁ウまでがあてられている。

もっと詳細にのべると、一丁目オに序文（敬明筆）があり、二丁目オより四丁目ウまでが目次（目録）で、五丁目オ以下に集めた処方例五七種が記録されている。二六丁オ以下末尾の三一丁オまでには別筆で二七種の処方附録として追加され、さらに表紙の裏（見返し）にも四種が書込まれ、合計八八種の処方例が収録されている。

本書の成立に関して現在のところ、長崎家系図中の三

人の人物が関与していると推定している。その第一は本書の中心部(第一〜二五丁)を記録した橘敬明すなわち、富山藩士吉川唯右衛門(八〇石)で、これは吉川家に生まれてのち長崎家の養子となった蓬洲の実父である。敬明唯右衛門は記述を終了した第二六丁の終りにも次のように署名をしている。

「天明八戊申三月朔日 吉川有鄰橘敬明」

また敬明の孫、吉川孫三が富山藩庁へ提出した由緒書には次のように書かれている。

「一祖父 吉川唯右衛門 敬明

後 蓼山与改名仕候

右蓼山儀、享保十七年出生仕、(以下略)」

なお、この由緒書からすると、天明八年は敬明五七歳の時であったことになる。また吉川氏は本姓橘氏であつたらしく、長崎家でも蓬洲・浩斎ともに橘姓で署名することがあつた。

第二の人物は別筆で附録部分を書いた人で、これは筆跡などからみて、蓬洲と推定される。もちろん、年代としては天明八年より以後、時に応じて書き加えて行つた

ものである。最後に人物は装飾し題箋を記入した浩斎である。これもその筆跡からの推定である。

次に本書の内容であるが、前記の目次を示すのが最良であろうが、紙数が足りないのでここでは割愛して概略を述べると、(一)各処方の内容は高度な漢方の専門的なもので、吉川敬明は武士でありながらも、漢方医としても相当な知識と理解力を有していたとみられる。(二)当時秘密とされていた、富山御薬所御方反魂丹、同御方寄応丸、同御方赤龍丹などの正確な処方^(果)が記録されている。なお本書の序文(第一丁オ)を^(果)示せば次の通りである。

「世に名方奇方と称する薬法あげては^(効)つるべからず、今爰に記(す)る所は即(ち)用ひて功を得たる秘方并諸家に今専ら名高き薬方一味も洩れされるやふに伝来して是をのするものなり。然りといへともその用ゆる時機を後れ、又薬種吟味おろそかなれば^(効)功驗なし。是薬方のうときに非らず。右にいふを^(効)く諸家の秘方言上此薬を以て世のいとなみとする人もあれば、ふかく秘して他に洩す事なかれと云。

天命戊申 歳仲春 一 (呉羽神経ナトリウム)